



財団法人

日韓文化交流基金

NEWS

2012.3.30 No.

61

Contents

1 — 第2期日韓新時代共同研究プロジェクト発足

2 — 第11回日韓歴史家会議

「社会最下層に対する比較史的考察」

3 — 青少年交流事業

訪韓・訪日研修団参加者の感想



ホストファミリーとのお別れ

4-5 — 助成事業紹介

・日韓高校生交流事業

「アジアの隣人：共に学び絆を結ぶ」

高木洋子

・日韓こども湿地交流

～COP10がつなぐ夢飛翔～

梅村幸稔

6-9 — フェロー研究紹介

・米軍政期南朝鮮の公報活動

— 韓国における「アメリカ」の存在を考えるために—
小林聡明

・日本初の寺院、飛鳥寺三金堂の源流はどこか？

— 百濟寺院からみた飛鳥寺三金堂の源流—
李炳鎬

10-12 — 日韓文化交流基金事業報告 (2011年10月～12月)

第2期

日韓新時代共同研究プロジェクト発足 「文化・知識・メディア交流促進」など 7つの研究テーマでスタート

第2期日韓新時代共同研究プロジェクトが発足し、2011年12月12日(月)に東京で第1回の会合を開催しました。

本プロジェクトは、2008年4月の日韓首脳会談での合意を受け、国際社会に共に貢献していく日韓関係を念頭に、多様な分野の日韓両国の専門家が共同研究を行うことを目的として発足されました。

第1期は2009年2月に開始し、「国際政治」「国際経済」「現在及びこれからの日韓関係」をテーマに両国の研究者26名が共同研究を行い、その成果として2010年10月に報告書『日韓新時代』のための提言—共生のための複合ネットワーク構築』を両国政府へ提出し、公開しました。

第2期の開始は2011年10月の日韓首脳会談であらためて合意されたもので、第1期共同研究に引き続き、今後の協力のあり方について研究することを目的として、小此木政夫日本側委員長(九州大学特任教授、慶應義塾大学名誉教授)、河英善韓国側委員長(ソウル大学校政治外交学部外交学専攻教授)をはじめとする日韓総勢32名の研究者が7つの研究テーマに基づき研究をスタートさせることになりました(第2期日韓新時代共同研究プロジェクトメンバーの一覧は12ページに掲載しています)。



全体会で両国の委員から意気込みが述べられた

研究テーマ

- ①文化・知識・メディア交流促進
- ②人的ネットワークの形成
- ③東アジア複合安保秩序構築
- ④原子力安全及びエネルギー協力
- ⑤環境パートナーシップ
- ⑥東アジア共生経済秩序構築
- ⑦複合共生技術協力

<http://www.jkcf.or.jp>

財団法人日韓文化交流基金

The Japan-Korea Cultural Foundation

〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号 虎ノ門ワイコービル4F

Tel:03-5472-4323 Fax:03-5472-4326

第11回日韓歴史家会議 「社会最下層に対する比較史的考察」

2011年10月28日(金)から30日(日)の3日間、世宗ホテル(ソウル)にて、第11回日韓歴史家会議が開催されました。

この会議は、2001年に日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として発足し、幅広い分野の歴史研究者が年1回の会議に参加し、最新の歴史研究の成果をもとに議論を行っています。

今回は大主題「社会最下層に対する比較史的考察」のもとで、「世界史における社会最下層」「東アジアの奴婢社会」「アジアの疎外最下層」を小主題に設定し、各セッションでの報告と討論において活発な議論が展開されました。

10月28日には講演会「歴史家の誕生」を開催し、小谷汪之(東京都立大学名誉教授)と尹炳奭(仁荷大学校名誉教授)が、研究者を志してから現在に至るまでの道のりや、研究の転機となった出来事などについて語られました。



第2セッション「東アジアの奴婢社会」

●日程

10/28(金)	<p>日韓歴史家会議開催記念講演会「歴史家の誕生」 司会：閔賢九(高麗大) 尹炳奭 「韓国歴史学界の周辺で」 小谷汪之 「土地制度史から地域社会論へ： インド史研究の新たな方法を求めて」</p>
10/29(土)	<p>1.世界史における社会最下層 司会：金炅賢(高麗大) 講演 韓貞淑(ソウル大)「最下層民の歴史に見る東西ヨーロッパ農奴制」 講演 坂口明(日本大学)「古代世界の中のローマ奴隷制社会」 全体討論</p> <p>2.東アジアの奴婢社会 司会：金裕哲(延世大) 報告 辛聖坤(漢陽大)「中国の奴婢」 [討論] 岸本美緒(お茶の水女子大) 報告 林学成(仁荷大)「韓国奴婢制の推移と奴婢の存在様態-朝鮮時代を中心に-」 [討論] 井上和枝(鹿児島国際大) 報告 細川涼一(京都橘大)「日本中世の非人」 (代読：宮嶋博史(成均館大)) [討論] 南基鶴(翰林大学校) 全体討論</p> <p>3.アジアの疎外最下層 司会：劉仁善(ソウル大) 報告 韓嬉淑(淑明女子大)「朝鮮時代の白丁の境遇と抵抗」 [討論] 塚田孝(大阪市立大) 報告 黒川みどり(静岡大)「近代日本社会における被差別部落民」 [討論] 朴秀哲(ソウル大) 報告 栗屋利江(東京外国語大)「インド社会におけるダリト(不可触民)をめぐって」 [討論] 李玉順(延世大) 全体討論</p>
10/30(日)	<p>4.総合討論 司会：李成珪(ソウル大)</p>

●日本側参加者(敬称略、五十音順)

栗屋利江(東京外国語大、南アジア近現代史)、板垣雄三(東京大学名誉教授、イスラーム学)、井上和枝(鹿児島国際大、朝鮮中世社会史)、岸本美緒(お茶の水女子大、中国明清史)、糟谷憲一(一橋大学、朝鮮近世・近代史)、木畑洋一(成城大、国際関係史)、黒川みどり(静岡大、日本近現代史)、小谷汪之(東京都立大学名誉教授、インド史)、近藤成一(東京大、日本中世史)、坂口明(日本大、西洋古代史)、佐々木隆爾(東京都立大学名誉教授、日本近現代史)、塚田孝(大阪市立大、日本近世史)、細川涼一(原稿のみ：京都橘大学、日本中世史)、宮嶋博史(成均館大、朝鮮史)

●韓国側参加者(敬称略、가나다順)

金炅賢(高麗大、西洋古代史)、金榮漢(西江大、西洋近世史)、金裕哲(延世大、中国史)、金泰植(弘益大、伽耶史)、南基鶴(翰林大、日本史)、閔賢九(高麗大、韓国中世史)、朴秀哲(ソウル大、日本史)、朴智賢(西江大、西洋史)、辛聖坤(漢陽大、中国史)、安輝濬(ソウル大、美術史)、延敏洙(東北亜歴史財団、日本古代史)、呉星(世宗大、韓国近世史)、柳永益(延世大、韓国現代史)、劉仁善(ソウル大、ベトナム史)、尹炳奭(仁荷大、韓国近代史)、李基東(東国大、韓国古代史)、李玉順(延世大学、インド史)、李成珪(ソウル大、中国古代史)、李柱郢(建国大、米国史)、李泰鎮(ソウル大、韓国近代史)、林学成(仁荷大、韓国近世史)、車河淳(西江大、思想史)、崔成哲(西江大、西洋史)、韓貞淑(ソウル大、西洋史)、韓嬉淑(淑明女子大、韓国近世史)、咸東珠(梨花女子大、日本史)

訪韓・訪日研修団参加者の感想

日韓文化交流基金では、次世代を担う日韓の青少年を対象に、相手国の社会の実情にふれ、人々との対話を行いながら相互理解を深めていくことを目的に、これまで多くの青少年交流事業を展開してきました。2007年度からは日本政府の「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として再編成され、事業規模を拡大して実施しています。

今回は、本事業に参加した人の声をお伝えするべく、今年度の10月から12月までに実施した訪韓・訪日研修団の参加団員の感想をご紹介します。また、訪日研修団では学校訪問やホームステイの受け入れをさせていただいた学校の学生やホストファミリーの感想もあわせてご紹介します。



ホストファミリーとのお別れ
(韓国高校生訪日研修団)



韓国での大学訪問
(日本大学生訪韓研修団)

訪韓研修団

日本中高生訪韓研修団

中学生団員より

- 上手く接することが出来るかすごく不安だったけど、韓国の子はみな優しく、明るく話しかけてくれた。言葉はわからなくても、必死に伝えようとすれば伝わることを学んだ。
- 私が感動したことは、韓国の人はすごく優しく、親切だということだ。通りすがりにあいさつをしてくれたり、道に迷ったりして困っていると優しく教えてくれたりして、親切な人が多いんだと、すごく印象に残っている。

高校生団員より

- ホームステイは緊張と不安でいっぱいだったが、楽しい時間を過ごせた。相手に伝えようとする気持ちや相手のことを理解しようという気持ち、思いやる気持ちだけで、たった1日しか一緒にいなくてもお互いにとって大切な存在になれることを、身をもって感じた。
- 韓国の高校生はすごく明るくて優しい子たちばかりだった。(学校訪問やホームステイに際し)韓国は反日の意識が強い国だと思っていたので不安だったが、この経験で印象がよくなった。

日本大学生訪韓研修団

団員より

- 日韓の違いについてディスカッションを行った時、韓国学生からの話を聞いて思いもよらない日本の文化思想が浮き彫りになるのを感じ、韓国の若者の考え方がよくわかり勉強になった。
- 韓国人は、日本人にはあまり親切ではないという先入観をもっていたが、この先入観を変化させてくれた。道に迷ったとき一緒に地図を見つ、周りの人に聞いてくれた人。明洞から一人で帰る時タクシーに乗るまで一緒に居て、ホテルまでの道のりを運転手に説明してくれたガードマン。とても温かく親切で、涙が出そうになった。
- 人生で初めてのホームステイ経験で、不安な気持ちで一杯だったが、とても温かく迎えてくれ、安心した。拙い英語と「カムサハムニダ」という言葉ぐらいでしか感謝の気持ちを伝える事ができなかったが、日本語を勉強中のお母さんが「家族でしょ。当たり前だよ。」と言ってくれた。この言葉は本当の家族になれたようでとても嬉しかった。

日本教員訪韓研修団

団員より

- 研修に参加する前の韓国の教育についてのイメージは、教育にかける熱意の高さとデジタル機器を用いた授業の姿というものだった。実際に学校現場を訪れると、パソコンや電子黒板を用いた最先端の授業を行う一方で、伝統楽器やテコンドーの授業も行われ、新しいものを取り入れるだけではなく、自国の文化を大切にしている様子も見ることができた。
- 訪韓研修を通じて、韓国の学校関係者とのつながりをつくることができた。このつながりを活かし、教育現場で日韓両国の良好な関係作りのために力を尽くしたいと思うようになった。

訪日研修団

韓国高校生訪日研修団

団員より

- 日本の高校は、放課後に部活動があるのがとても羨ましく思った。韓国では放課後、夜遅くまで学校で勉強をするのが一般的だが、部活動をしている日本の高校生の姿を見て、勉強より大事なものは、自主的に自分のしたいことをすることであると感じた。
- ホストファミリーが私のために日本の家庭でしか食べられない料理を何時間もかけて作ってくれた。たった1泊2日という短い間だったが、心からのおもてなしをしてくれ、よい思い出をつくってくれた家族にとっても感謝している。

日本人高校生より

- 今回の高校生との交流は自分にとって初めて異文化に触れる機会だったので、新しい発見がたくさんあった。特に韓国の高校生の1日の学習時間は日本よりもはるかに多くて、とても驚いた。この話を聞いて負けていられないと思った。

ホストファミリーより

- 私の家に来た学生は、とても日本の社会に対しての関心が高く、自動販売機の多さやヨーグルトやチーズなどの値段の高さ、食の違いについて話してくれた。言葉の壁や文化の違いがあることがわかり、すごく勉強になった。

韓国大学生訪日研修団

団員より

- 自分が考えていた日本と実際の日本は違った。今まで得ていた情報だけでは誤解を多く生むことがわかり、可能な限り自分の目で直接見て、体験することが大切だと思った。
- 来日前は言語面で不安だったが、韓国語の上手な日本の学生が多く、楽しく話し合いができた。

日本大学生より

- 韓国人と私生活の話や、自国の文化について気軽に話すことができ、同年代の子たちと直接会話し、先入観や偏見をなくすことができた。交流をした子のうちの一人とは今でも連絡を取り合っていて、国境を越えた友人を作れたことがうれしい。
- 韓国の子たちは常に前向きで、一生懸命で、陽気なため、一緒にいて面白かった。就活が始まり不安だったが、彼女たちを見て元気をもらった。

ホストファミリーより

- 帰り際にアルバムを手渡すと、とても喜んでくれ、また私たちに手紙をくれた。'心'が伝わったことが今回の最大の収穫だった。実の娘にも言われたことのない温かい言葉をかけてもらい、感動した。

発端はアイアーン国際会議

2010年の夏、カナダのジョージア大学で開催された第17回 iEARN (アイアーン) 国際会議で、アイアーン韓国代表の朴智賢さんに声をかけられた。彼女はグローバルな交流事業を促進する YES International のマネージングディレクターの肩書をもつ女性であった。

その活動の一つに International High School Program があり、従来の対象欧米諸国に加えて、初めてアジアの国、日本とのプログラムを JEARN と企画したいという。もちろんこちらに異論はなく、2人で夢になって企画を練りこれが本事業の発端となった。

まず手始めに翌2011年1月末の7日間、韓国から男女5名の高校生が引率者と共に神戸に来日。市内高等学校の授業やクラブ活動に参加し、地元神戸の高校生による防災会議や民族色いっばいのユースサミットに参加し、それぞれの場に韓国カラーを添えた。

出発前にSNSで準備

日韓の高校生の交流を目的とした本事業の実施が決定すると、朴智賢さんとともに日韓のアイアーン同士で打ち合わせに時間をかけ、ICT環境を整え協働に耐える体制をつくり、メール交換に加え何度も夜中のスカイプ会議を行った。

公募の結果は、蓋をあけてみると、なんと約2倍の応募があり私たちが驚かせた。各高校から複数の応募者があると1人に絞らざるをえず、選考に漏れた生徒たちの失望する様子が想像され、とても辛い仕事であった。10月2日は保護者同伴の説明会を催した。高校生たちは、韓国側事務局である YES International の朴智賢さんと、スカイプを通して英語・韓国語のチャンポンで会話を楽しんだ。兵庫県民団副団長も加わり和やかな説明会であった。

特筆したいのは、日本側の参加者を対象に設定した本事業の SNS である。彼らは日々書き込みをして、出発までには知らない者同士が、一つのコミュニティの意識をもつようになった。また民団副団長による韓国語講座を数回にわたり開いたことは、彼らの言葉による不安の解消に役立ったように思う。

19名の高校生と当NPO 福井理事長と宗光事務局、さらに、大正琴を通した国際交流を推進している廣田先生も、大正琴を通した交流とビデオ記録を担われるため名古屋から合流し、11月1日、関西国際空港から韓国へと一週間の交流事業に旅立った。

「生徒たちの報告集—見て、聞いて、感じて」より引用

三村遼平 (兵庫県立芦屋国際中等教育学校)

今回のホストファミリーの方は、僕に「日本と韓国は昔戦争をした。しかし、これからは君達が両国と世界の平和を築くんだ」とおっしゃいました。(略) 今回の事業を通して、少なくとも僕は、この世界の「平和」とは、「平和」を祈るのでなく、別の「国」という印象を消すくらい勢いでなければ、世界は変わりはないのだと改めて確信しました。

共に学び絆を結ぶ —引率 福井理事長報告—

旅の前半は、群山市の全北外国語高校での授業参加だった。この高校は全寮制で、朝7時30分から夜中まで学校で勉強する。長時間にわたる学習の集中力を保つため、生徒はめいめい廊下などに机を持ち出して自主学習を続け、そのエネルギーと勉強に対する熱意に頭が下がった。それほど勉強に忙しい彼らが、日本からの高校生を迎えるために多くの時間を割いてくれ、その精一杯の歓迎の気持ちが日本の彼らにも十分に伝わった。

午後は、バスに乗って群山市の近郊にある「韓国の昔の町並み」を保存した町を訪ね、韓国の伝統的な結婚式を体験した。参加者は古典的な結婚衣装を着せてもらい、可愛い花嫁姿を披露した。3日間を過ごした全北外国語高校で、涙涙の感動のお別れ会の後、旅の後半は、城南市ユースセンターでのプログラムに参加した。日韓の高校生が、市場でお互いの国の行事に必要なものを買集めるという課題に協働して取り組み、ディスカッションとプレゼンテーションを行った。



全北外国語高校にて

隣人とこれから

日韓の高校生が、それぞれに貴重な体験をしてこの事業を終えた。若者たちの絆が将来の日韓両国の礎となる。彼らによる国境を越えた新しい社会づくりを期待したい。



Profile

高木洋子 (たかぎ ようこ)

特定非営利活動法人
グローバルプロジェクト推進機構 (JEARN) 理事。
JEARN (正式名称「グローバルプロジェクト推進機構」) は、iEARN (アイアーン) の日本のセンターであり、日本で初めての本格的な国際交流学習プロジェクトを推進する NPO (特定非営利活動法人)。
* iEARN (アイアーン) とは、世界 130 カ国・30 言語・26,000 教員・200 万生徒・200 プロジェクトからなるグローバルな NPO 教育ネットワーク。

COP10の繋がりを生かした交流

2011年12月25日から28日の4日間、『日韓子ども湿地交流～COP10がつなぐ夢飛翔～』の2011年度事業となる訪韓プログラムを行いました。この事業は、2008年に「ラムサール条約(特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約)」の第10回締約国会議が開催された韓国の慶尚南道昌原市と、2010年に「生物多様性条約」の第10回締約国会議が開催された名古屋市の間で始められたもので、この2つの条約はともに、自然と生きものに関心を置いた国際条約であり、また第10回締約国会議(Conference of the Parties 10、略称「COP10」)であったため、そのつながりを生かし、日韓双方の自然の中で活動する子どもたちの活動交流が実現したのです。

名古屋にある藤前干潟では、2009年度から小中学生を対象に、干潟での1年の活動を通し自然や生物多様性について体感学習する「ガタレンジャーJr.」という環境教育プログラムを実施し、「もっと広い視野で自然のことを学びたい」という子どもたちの希望を育んできました。そこで慶尚南道で自然活動の指導者をしている李仁植先生イ・インジツに相談したところ、慶尚南道ラムサール財団を通じて、子どもたちに田んぼでの活動を通して湿地と生きものについて学習指導している「慶南環境教育センター」を紹介してもらいました。

2010年度の第1回日韓子ども湿地交流事業では、夏に藤前干潟の子どもたちが韓国慶尚南道を訪問し、秋の生物多様性条約COP10開催時に韓国の子どもたちが名古屋を訪問するという相互訪問を行いました。2011年度の第2回目からは互いに隔年訪問とし、藤前干潟の子どもたちが訪韓し、慶尚南道の水田などで活動する子どもたちと交流することになりました。

ガタレンジャーJr. 昌原市を訪問

12月25日、名古屋を出発したガタレンジャーJr.の参加メンバー10名は、昌原市を訪問しました。この日は翌日に備え早めに就寝することになりました。

翌日、ラムサール条約に登録されているチュナム貯水池やその周辺の田んぼ及びウボ沼で活動する韓国の子どもたちと合流し、



固城市のクロハゲワシ保護地で記念撮影

バスでウボ沼や固城市のクロハゲワシ保護地へ行きました。初対面の子どもたちは初めのうちはぎこちない雰囲気でしたが、ウボ沼に着いた頃には自然と打ち解けていました。互いに自然や生きものに関する活動に普段からなじんでいるため、自然観察を通じて共通の話題をみつけたり、言葉は通じなくとも身振り手振りで何かを伝え合うなど、友情が育まれていく様子が手に取るようにわかりました。

交流が進むにつれて、移動のバスの中は日本語と韓国語、そして英単語が飛び交い、会話の内容は自己紹介や普段の生活のこと、好きなアニメやアイドル、友人関係など多岐にわたり、いつの間にか、通訳が無くともなんとなく会話が成り立っていました。

夕食で行った焼肉店では、ガタレンジャーJr.のメンバーは韓国の子どもたちに韓国式の焼き肉の食べ方などを教えてもらいながら賑やかな食事を楽しみ、その後宿舎に戻り活動発表と交流会を実施しました。韓国の子どもたちからは、チュナム貯水池や水田の活動について発表があり、ガタレンジャーJr.のメンバーは日頃行っている藤前干潟の活動や日本の文化に関する発表を行い、東日本大震災についての報告、韓国からの義援金や支援に対するお礼を伝えました。

その後もウボ沼で観察したものの発表やチュナム貯水池での班別テーマ観察など、ワイワイガヤガヤとした雰囲気での発表が続き、最後にプレゼントを交換。お別れの時を迎え、「来年名古屋に行くね」「待っているよ」と握手を交わし、交流会は終了となりました。

来年度は5月に訪日プログラムを行う予定で準備を始めます。このプログラムを通して、日韓の自然や環境問題についてともに考え行動できる人材が育つことを願い、今後も続けていきたいと思っています。



交流会で発表する日韓の子どもたち

Profile

梅村幸稔

(うめむら・ゆきとし)

NPO法人藤前干潟を守る会
理事・干潟案内人

藤前干潟での活動に小学生時代から参加。現在、藤前干潟やその流域での生きもの調査や環境学習の指導などを行う。また、2001年から韓国の干潟をめぐり、干潟を利用する渡り鳥の調査にも取り組んでいる。

NPO法人藤前干潟を守る会とは、藤前干潟の魅力と価値を広く伝え、内外の環境保全に大きな影響を与えることを目指した市民活動体である。



米軍政期南朝鮮の公報活動

—— 韓国における「アメリカ」の存在を考えるために ——

「新しい外交」のあり方？

9・11テロやイラク戦争以降、アメリカを中心として、外交政策の円滑な遂行のための手法として「ソフト・パワー」や「広報文化外交」の重要性が、ことさら強調されるようになっていく。日本外務省は、2004年8月に海外公報と文化交流を統合した広報文化交流部を発足させ、より体系的な広報文化外交を推進する体制を整備した。中国では、2007年に開かれた中国共産党第17回大会において、全民族の文化的創造力を喚起し、国家の文化ソフト・パワーを充実させるべきとの報告書が、胡錦濤国家主席により正式に提出された。ソフト・パワーや広報文化外交と呼ばれる、軍事力や経済力などの強制性に依存せず、イメージや親近感を強調することで相手国国民の心を掴もうとする外交のあり方が、世界中でさも新しいものかのように脚光を浴びている。

だが、実際には、日本は1920年代から中国や米国を主たる対象とした対外宣伝活動を開始し、1934年には国際文化振興会(KBS)を設立するなど、日本の文化広報外交は戦前期から実施されていた。また、アメリカでは、第二次世界大戦期における心理戦の一環として、政府機関によるラジオや出版物を通じた広報文化外交が戦略的に行われていた。現在、「新しい外交」のあり方として注目されているソフト・パワーや広報文化外交は、決して「新しいもの」ではなく、むしろ、長い時間的ながれのうえに生じた、きわめて歴史的なものとして捉えられる。

それでは、いったいソフト・パワー、あるいは広報文化外交と呼ぶものは、東アジアにおいてどのように展開されたのだろうか。ここに、私のもっとも大きな問題関心がある。以上の問題関心をたずさえ、本フェローシップの助成によって実現

した韓国滞在では、アメリカが韓国において、どのようにソフト・パワーを行使し、広報文化活動を実施したのかを考えるために、米軍政期における「公報」(Public Information)に着目し、アメリカの情報教育政策に関する研究を行った。以下、研究内容について、紹介することにした。

米軍政による公報活動

1945年夏、朝鮮半島は日本の植民地支配から解放された。だが、ほどなくして朝鮮半島には米ソ両軍が進駐することになる。同年8月下旬、北朝鮮地域に進駐したソ連赤軍第25軍は、平壤にソ連軍民政部を設置し、占領統治を開始した。一方、南朝鮮地域には、9月上旬に米陸軍第25軍団が上陸し、占領統治機構である米軍政庁を設立した。ソ連軍の北朝鮮占領は、1948年9月の朝鮮民主主義人民共和国の成立まで続き、米軍の南朝鮮占領は、1948年8月の大韓民国の成立まで実施された。米軍が南朝鮮占領を実施した3年間は、韓国において、米軍政期と呼ばれている。米軍政期は、わずか3年間という短い時代であった。だが、それは、その後の韓国の存在様式を規定する、きわめて重要な時代でもあった。

米軍政庁公報部門は、占領統治開始直後から、積極的な公報活動を展開した。公報活動の一環として、南朝鮮の人びとに対する大量の情報が流布され、彼ら・彼女らの教化が試みられると同時に、彼ら・彼女らが何を考え、どのような思いを持っているのかを把握すべく世論調査が実施された。こうした公報活動では、リーフレットやポスター、雑誌、新聞などの出版物のほか、映画やラジオなどの多様なメディアが活用された。とりわけ、非識字率の高かった解放直後の朝鮮半島では、ラジオが、



ソウルに進駐するアメリカ軍 (1945年9月) : アメリカ国立公文書館所蔵



米軍政庁公報紙『週刊ダイジェスト』を発行する米軍人 (1946年1月) : アメリカ国立公文書館所蔵



活字メディアに比べて、絶大な公報効果を有していた。

情報循環システムとしての公報活動 —普及・収集・統制

日本にかわる新たな統治主体として出現した米軍政庁は、1945年9月中には傘下の公報部門を通じて、朝鮮の人びとが抱いていた完全独立への思いを、ゆっくり、慎重にすべきものへと「修正」していった。それが、米軍政庁公報部門が最初に着手した任務であった。

米軍政庁の公報部門は、朝鮮人関係・情報課 (Korean Relations and Information Section: KRIS) として発足した。KRISはアメリカ人の管理職3人と朝鮮人職員20人から構成され、朝鮮人からの情報収集と朝鮮人への情報普及を主要な任務とした。KRISは、ラジオ放送局の管理にも着手した。北緯38度線以南にあったラジオ放送局10局すべてが、KRISの管理下におかれた。ラジオ番組といったソフト面はKRISが、ラジオ局運用の技術的、経営的な面は米軍政庁通信部が担当した。その後、KRISは、情報・諜報課 (Information and Intelligence Section: IIS) を経て、公報課 (Public Information Section) へと改称された。さらに1946年2月に公報課は公報局へ、同年5月には公報局から公報部へと組織改編された。

公報課では、ポスターやリーフレットなどの出版宣伝物の作成、映画製作、ラジオ局の運用、ラジオ番組の制作が行われた。また、対面調査や南朝鮮で出版された新聞・雑誌の内容分析などを通じて、南朝鮮住民の意見動向の調査、政党関連情報の収集、政治動向の分析なども実施された。公報課は、印刷メディアだけでなく、ラジオや映画などの視聴覚メディアを駆使して



ソウル放送局調整室 (1946年6月): アメリカ国立公文書館所蔵

情報の普及を進めるとともに、南朝鮮住民の考え方や思いを政治的な側面から把握すべく、情報収集を実施していた。公報部への組織改編後、公報活動はさらに強化された。南朝鮮で出版されるすべての政党や新聞、定期刊行物の登録・許可・調査・検査が、新たな活動内容として書き加えられた。米軍政期南朝鮮で行われた公報活動は、情報の普及と収集、統制を主要な機能として組み込んだ包括的な情報の循環システムによって支えられていた。

韓国における「アメリカ」の存在

米軍政庁の公報部門が、公報活動の効果としてもっとも期待したことは、大韓民国成立後におけるアメリカの影響力維持であった。そこでは、朝鮮人に「民主主義」を「教育」することで、アメリカによって具現される「民主主義」の偉大さが示され、共産主義に対する優越性が顕示された。公報部門は、こうした目的を実現するために、たんにアメリカの政治や経済だけでなく、歴史や文化、ライフスタイルにいたる幅広い情報を南朝鮮住民に広め、アメリカの魅力を徹底的に示し続けていった。そこには、「民主主義」やライフスタイルによって表象される「アメリカの魅力」を資源として、独立する新興国家の国民を自陣営に引きつけておこうとする、ソ連との激しい対立を背景とした冷戦という時代の必然的な要請があった。こうした「アメリカの魅力」を資源とする米軍政庁による公報活動は、明らかに現代のソフト・パワーや広報文化外交の議論に通ずるものがある。このことは、戦後、世界の広範な地域で、米國務省や広報文化交流庁 (USIA)、その傘下の米公報院 (USIS) が行った広報文化外交と、米軍政期の公報活動が、どのようにつながっているのかという重要な問題の解明に意欲をかきたてる。

韓国滞在中に取り組んだ米軍政期における公報活動研究をさらに発展させ、アメリカは韓国において、どのように広報文化外交を実施したのかを歴史的に跡づける研究を続けていくつもりである。それは、アメリカが、広報文化外交を通じて、韓国人びとの心の中に、何を残したのかを明らかにすることであり、韓国における「アメリカ」の存在を考えるための必須の課題であると考えている。



Profile

小林聡明 (こばやし・そうめい)

一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了。2010年3月、博士(社会学)学位取得。現在、東京大学大学院総合文化研究科学術研究員。専門は、東アジア国際政治史、メディア史、朝鮮半島地域研究。単著書に『在日朝鮮人のメディア空間—GHQ占領期における新聞発行とそのダイナミズム』(2007年、風響社)などがある。

日本初の寺院、飛鳥寺三金堂の源流はどこか？

—— 百済寺院からみた飛鳥寺三金堂の源流 ——

はじめに

日本初の本格的な寺院である飛鳥寺が588年に百済の技術者らによって完成されたということは歴史に関心がある日本人ならば誰も知っている。これが史実であることは、日本古代の文献史料と考古学的発掘資料を通じて明らかに確認できる。一方韓国の場合、学校の教科書に百済から日本に仏教が伝わったという内容が記載されているが、その具体的内容が説明されることはほぼない。これは研究者の場合も同じであり、百済のどんな文化要素が、どのような経緯で日本に伝播したのか本格的に追及した韓国の研究はほとんどないといっても過言ではない。これは、日本の立場からみると、少し腑に落ちないかもしれない。著者もまた同様である。そのため、より多くの史料が残っている日本の研究成果を参考に、百済寺院と飛鳥寺とを比較研究する必要性を切実に感じた。百済から日本に技術が伝播された過程を解明することにより、百済社会の断面を垣間見ることができようという漠然とした期待を抱いていた。そのような模索過程で注目したのが飛鳥寺の三金堂に関する問題であった。

1950年代後半、奈良国立文化財研究所が設立後初めて実施した発掘調査により、飛鳥寺の伽藍配置が、百済故地で一般的に見られる塔と金堂、講堂が南北一直線上に配置されたいわゆる四天王寺式伽藍配置を踏襲していたのではなく、3つの金堂が品

形に配置された独特な形式をとっていたことが確認された(図1)。その後、日本の学会では飛鳥寺の造営における伽藍配置だけは百済ではなく、図2のような高句麗寺院の影響を受けたものではないかと推定され、これが現在の定説となっている。当時の発掘者らは図1の品字形に配置された3つの建物址を金堂とみなし、これら三金堂は高句麗の寺院以外では確認されなかったため、飛鳥寺三金堂の高句麗起源説が提示されたのであり、当時としては当然の帰結だった。

しかし、飛鳥寺では三金堂という寺院のプラン以外に高句麗寺院と関連づけられるものはまったく発見されなかった。これによって三棟の建物址が2つの時期にまたがって造営されたという説や、百済地域で飛鳥寺の三金堂と同じような建物が今後発見されるのを期待する説、高句麗の文化が百済を経て再び日本に伝播したのだろうという見解などが提示された。しかし、2つの時期に造営されたとする説は史料批判と発掘調査の結果を再検討したところ、早期に否定された。これに対し筆者は、後の二者の立場から飛鳥寺三金堂の百済起源説を新しく提起した。すなわち、百済寺院址に対する最近の調査では飛鳥寺三金堂とまったく同じではないが、類似した性格の建物址が確認されており、百済文化の中で高句麗的である要素が多数確認され、これが百済を通じて伝わった可能性が高いと論証した。

日本の古代史や考古学界では、古代日本に伝わった朝鮮半島の文化を高句麗系や百済系、新羅系、加耶系などに機械的に区分して理解しようとする傾向がないわけではない。しかし、最近の発掘調査では朝鮮半島内部でも高句麗的なものと百済的なもの、新羅的なものの境界が曖昧になり相互に影響を与え合っていることが確認されている。古代国家間の政治・軍事・外交関係により技術者の移動や交流があったためであるが、そのうち6世紀代の公州・扶餘地域では装飾品や土器類の類をはじめとした高句麗系の文化要素が多数確認されている。すなわち百済の中心地域でも有頸土器[耳杯]、楪匙、盤、带状把手附壺、暗文土器、甌などの土器類をはじめとする煙家、オンドル、瓦當、二重基壇、1棟2室建物址とともに多様な遺物・遺蹟から高句麗の影響が確認された。

飛鳥寺三金堂の百済起源説

5世紀末や6世紀初めから始まった高句麗の影響は食生活や住生活に限定されず、6世紀中葉からは次第に支配層の文化にも影響を与えた。王陵群である扶餘陵山^{フヨウリンサン}里古墳群の東下塚で発見された壁画では百済の最高位層の墳墓にまで高句麗の影響が端的に見られる。高句麗と百済は漢江流域の争奪戦を繰り広げ、戦争捕虜の移動などを通じて人的・物的交流をするようになり、威徳王は567年を起点とし、南朝を主とした外交から逃れ、北朝と高句麗系統の文化を積極的に受容したため、このような状況が現れたと思われる。

図1 飛鳥寺(日本, 588年)

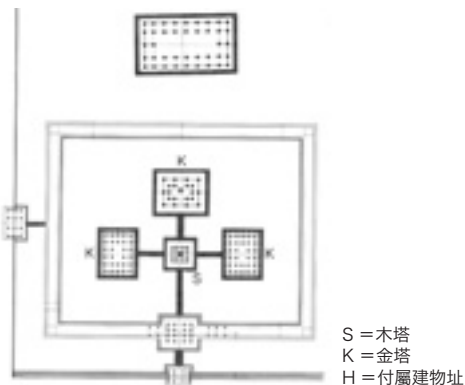
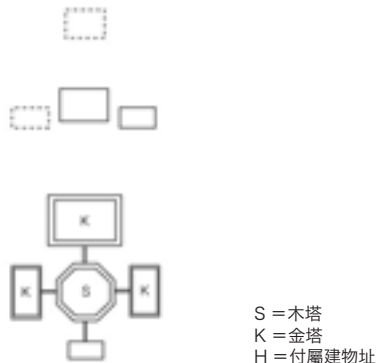


図2 平壤 清岩里寺址(高句麗)





このような観点からみると高句麗清岩里寺址で見られる三金堂という要素が直接、日本に伝えられたということではなく、百済を経由して百済文化の一部として日本に伝達した可能性を提起することができる。(しかし、百済では今まで7世紀前半(639年)に建立された益山弥勒寺址^{イグサンミルゴ}以外では三金堂が確認されていないため、百済寺院で三金堂と類似した建物が確認される必要がある。)

これに関連し、最近注目を集めているものは、扶餘陵山里寺址、^{フンフン}王興寺址などで確認された、いわゆる附属建物址である(図3・4のH)。東西回廊址の北端に左右対称を成している建物址が飛鳥寺で三金堂に変換されたのではないかと主張が提示されており、これがある新聞に大きく報道されたためである。しかし、この附属建物址は東西回廊址の北端に位置し、南北に細長い形態の建物であるため、仏殿のような位相を持つというよりは、公的な性格が強い僧坊のようなものと見るべきだろう。(以前、筆者はこの附属建物を「東堂・西堂」と呼ぶことを提案したことがある。)

一方、扶餘軍守里寺址や王興寺址の東西回廊と東堂・西堂の外郭から独立した形態の建物址が発見され注目されたことがある(図3・4のK?)。現在発掘が進行中である王興寺址では、東西回廊外郭で金堂と類似した位相を持つ独立した建物址が確認されている(図4)。まだ調査中のため速断することはできないが、独立した空間に中央の金堂と平行するように位置しているこの建物は、他の建物より格が高い建物であることは明らかだ。したがって、この建物址と飛鳥寺三金堂は関連があり、これをどのように命名するかによって、飛鳥寺のいわゆる東西金堂址の性格が再検討されることになるだろう。

百済寺院で図3・4のような回廊外郭が独立した建物址が出現した背景には、中国の南北朝の多院式寺院や高句麗寺院の影響が考えられる。軍守里寺址と王興寺址で確認された回廊外郭の東西にある建物址やこれらが配置されている方式、空間の区画方式などがたいへん類似しているからである。さらに、百済寺院と新羅・日本の伽藍配置では相関性があるようだ。百済寺院で東堂、西堂および東西回廊が撤去された形態が皇龍寺址の重建伽藍である三金堂と類似し、これを高句麗的な品字形に配置させたことが飛鳥寺の三金堂に該当するとみることができるからだ。百済では南朝や高句麗寺院の影響をとともに受けながら、方形木塔や回廊の北端にある東堂・西堂、二重基壇のような多様な文化要素を内在化し、新しく北朝の影響を受け入れながら、百済的な寺院型を完成させていった。それとともに、建物型式の変遷では玄光による弥勒信仰の流布のような仏教思想的な変化も背景となっているだろうと思われる。

「人間の移動」による技術の伝播

飛鳥寺三金堂の高句麗起源説で見逃されていることがある。これは当時百済から派遣された技術者が個別に倭に渡ったので

図3 扶餘 軍守里寺址

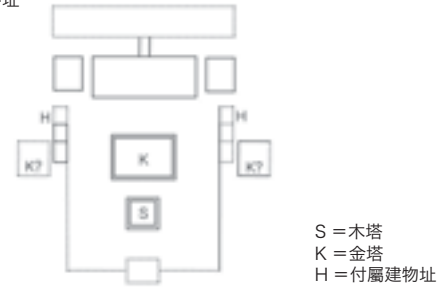
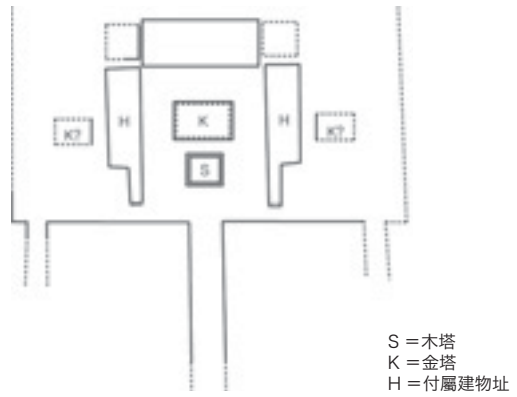


図4 扶餘 王興寺址 (577年)



はなく、国家で組織したプロジェクトチームのような形で派遣された点である。古代寺院の造営技術は古墳と異なり、多様な手工業技術が集大成されたため、技術の相互依存度や提携度が高い。仮に、百済から派遣されたプロジェクトチームで当初、一棟の金堂を作ろうとしたがこれが外部的な要因によって計画が変更され三棟の金堂を作ることになったとしたなら、設計変更による他の工事部分の余波がかなりあったと思われる。そのため、伽藍配置という要素のみ高句麗の影響を受けたとみることは根本的に無理があるという。筆者は飛鳥寺で見られる多様な系統の造営技術や寺院のプランは全的に百済から派遣されたプロジェクトチームにより総合的に実施されたものだと見るべきだと思う。

飛鳥寺の造営が百済の造寺工をはじめとする各種技術者らによって完成されたが、だからといって、百済寺院とすべて同じではない。飛鳥寺の創建期に使われた瓦はこれらをよく反映している。このような現状は受け入れの主体である、蘇我氏の立場や日本仏教界の事情が反映され、変形が起きたからだろう。仏教寺院の建立は単純なモノの移入ではなく「人間の移動」による技術の伝播の過程であった。今後、この過程で発生した変化の内容に対しても、注目しなければならぬものだろうと思われる。



Profile

李炳鎬 (イ・ビョンホ)

2005年ソウル大学大学院国史学科博士課程修了
1998年より韓国国立中央・扶餘博物館などで勤務、2007年より国立中央博物館学芸研究官(在職中)。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2011年度第3四半期(2011年10月1日から12月31日まで)の実施事業を紹介します。

青少年交流事業

● 訪日団

団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
韓国高校生 (第3団)	安貞絢(アン・ジョンヒョン) 国立国際教育院研究士	54	20	30	10/20～26	和歌山県立 田辺高校
韓国高校生 (第4団)	鄭命錫(チョン・ミョンソク) 慶尚南道教育庁奨学士	54	18	32	10/20～26	長崎県立 長崎北高校

*1 引率含む *2 生徒のみ



長崎北高校でのお別れ会
(韓国高校生訪日研修団第4団)

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
韓国大学生 (第3団)	趙来喆(チョ・レチョル) 順天大学校日本語日本文化 学科教授	29	11	18	11/1～10	上智大学 和歌山大学
韓国大学生 (第4団)	朴載燮(パク・ジェソプ) 仁済大学校人文社会科学大 学韓国学部教授	30	6	24	11/1～10	青山学院大学 愛媛大学
韓国大学生 (外務省招聘)	文邵熙(ムン・ソヒ) 外交通商部文化交流協力課	30	10	20	11/8～17	目白大学



愛媛大学での学生交流
(韓国大学生訪日研修団第4団)



着物体験
(外務省招聘韓国大学生訪日研修団)

アジア国際子ども映画祭参加訪日団

昨年度に続き、アジア国際子ども映画祭(本選12月3日(土)、南あわじ市)に参加するため、韓国から高校生10名を11月29日(火)から12月7日(水)までの9日間招聘しました。この映画祭には国内のみならず海外10の国と地域より子どもたちが参加し、異なる国や地域の作品を互いに鑑賞し合うことで、相手国の文化や習慣、自分たちの考えとの共通点や相違点などを知ることができ、相互理解の強化および友好関係の構築を図ることができると考えています。一行は映画祭への参加に加え、早稲田大学川口芸術学校(埼玉県川口市)などの訪問及び交流、ホームステイ、日本文化体験など、多岐にわたるプログラムを行いました。

日程	
11/29	入国(日本へ移動)／各国別オリエンテーション 外務省代表者面会式
11/30	早稲田大学川口芸術学校訪問
12/1	兵庫県へ移動
12/2	淡路三原高等学校訪問
12/3	アジア国際子ども映画祭 本選／歓迎レセプション
12/4	ホームステイ
12/5	人形浄瑠璃鑑賞／瓦焼きペインティング体験
12/6	ワークショップ
12/7	帰国(韓国へ移動)



● 訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	主な訪問先
日本大学生 (外交通商部 招聘)	森本康敬 外務省アジア大洋州局 北東アジア課日韓交流室長	30	11	19	10/25～11/3	釜山外国語大学校
日本教員 (第2団)	吉武優子 文部科学省初等中等教育局 初等中等教育企画課教育制 度改革室一貫教育支援係長	20	13	7	11/15～24	慶熙初等学校 徽慶中学校 始興陵谷高等学校 (ソウル)



釜山外国語大学校にて
(外交通商部招聘日本大学生訪韓研修団)

団体名	団長	計 *1	男 *2	女 *2	期間	主な訪問先
三重県 中学生	山本信一 鈴鹿市立鈴峰中学校校長	53	9	40	10/9～15	中浪中学校 (ソウル)
長崎県 高校生	鶴田勝也 長崎県立島原高等学校教頭	53	4	46	10/23～29	漢陽大学校師範大学 附属高等学校(ソウル)
東京都 高校生	仙田直人 東京都教育庁指導部高等学 校教育指導課主任指導主事	53	11	39	11/20～26	銅雀高等学校 (ソウル)

*1 引率含む *2 生徒のみ



キムチ作り体験
(長崎県高校生訪韓研修団)



銅雀高等学校でソーラン節披露
(東京都高校生訪韓研修団)

韓日文化交流基金訪日団

韓日文化交流基金の第24回訪日代表団が2011年11月23日(水)～26日(土)まで来訪し、24日(木)に鮫島会長の主催で晩餐会を開催し、意見交換を行いました(於ホテルオークラ東京)。

● 韓国側参加者

韓日文化交流基金関係者

李 相 禹(イ・サンウ)

李 爽 鎔(イ・ソギョン)

崔 秉 烈(チェ・ビョンヨル)

金 熙 淑(キム・ヒスク)

孫 承 喆(ソン・スンチョル)

芮 榮 俊(イェ・ヨンジュン)

趙 星 元(チョ・ソンウォン)

金 秀 雄(キム・スウン)

韓日文化交流基金理事長、前翰林大学校総長

韓日文化交流基金理事、前韓日議員連盟事務総長

韓日文化交流基金理事、元ハンナラ党代表

韓日文化交流基金運営委員、フルート演奏家

韓日文化交流基金運営委員、江原大学校教授

韓日文化交流基金運営委員、中央日報記者

韓日文化交流基金運営委員、KBS記者

韓日文化交流基金常任理事・事務局長

駐日本韓国大使館

李 京 秀(イ・ギョンス)

駐日本韓国大使館政務公使

第2期日韓新時代共同研究プロジェクト メンバーリスト

第2期日韓新時代共同研究プロジェクトのメンバーは以下の通りです。
(第1回会合の様子はP1に掲載しています。)

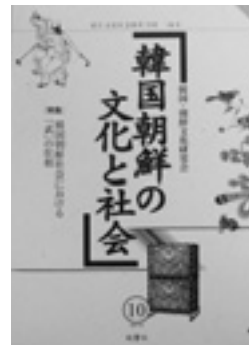
	日本側(敬称略、五十音順)		韓国側(敬称略、フナナド順)	
委員長	小此木政夫	九州大学特任教授、慶應義塾大学名誉教授	河英善	ソウル大学校政治外交学部外交学専攻教授
委員	小川英治	一橋大学大学院商学研究科教授	金基石	江原大学校政治外交学科教授
	木村福成	慶應義塾大学経済学部教授	金良姫	大邱大学校経済学科教授
	小針進	静岡県立大学国際関係学部教授	金雄熙	仁荷大学校国際通商学部副教授
	児矢野マリ	北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授	金浩燮	中央大学校政治国際学科教授
	澤田康幸	東京大学大学院経済学研究科准教授	文興鎬	漢陽大学校国際学大学院中国学科教授
	添谷芳秀	慶應義塾大学法学部教授	朴榮濬	国防大学校安保大学院副教授
	田所昌幸	慶應義塾大学法学部教授	朴喆熙	ソウル大学校国際大学院教授
	田中明彦	東京大学大学院情報学環教授	孫冽	延世大学校国際学大学院教授
	中西寛	京都大学大学院法学研究科教授	尹徳敏	外交安保研究院教授
	長岡貞男	一橋大学イノベーション研究センター教授	李淑鍾	成均館大学校国政管理大学院行政学科教授
	西野純也	慶應義塾大学法学部准教授 *日本側幹事	李元徳	国民大学校国際学部教授 *韓国側幹事
	平岩俊司	関西学院大学国際学部教授	張濟國	東西大学校総長
	深川由起子	早稲田大学政治経済学術院教授	全在晟	ソウル大学校政治外交学部外交学専攻副教授
	村田晃嗣	同志社大学法学部教授	全鎮浩	光云大学校国際協力学部副教授
	薬師寺泰蔵	公益財団法人世界平和研究所理事・研究顧問	洪鍾豪	ソウル大学校環境大学院副教授

◆メンバーの所属は第2期日韓新時代共同研究プロジェクト発足時のものです。

学術定期刊行物助成

人文社会科学分野の学会・研究会の研究成果として刊行される学術定期刊行物を支援する事業です。2011年度助成対象団体(2団体)より、次の研究成果物が刊行されました。

- 『韓国朝鮮の文化と社会 10』
(韓国・朝鮮文化研究会編、風響社)
- 『現代韓国朝鮮研究 第11号』
(現代韓国朝鮮学会編、中西印刷株式会社)



「韓国朝鮮の文化と社会」



「現代韓国朝鮮研究」

維持会員

2011年10月1日～12月31日の期間に、個人会員11名の方に維持会員制度にご加入いただき、11万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(敬称略、五十音順)。

[個人]

青野正明 磯崎典世 市吉則浩 林在圭 勝村誠 黒柳慶子
徐正基 徐賢燮 武末純一 南潤珍 広瀬貞三